

出題分析		
試験時間	120 分	配点 200 点
		大問数 5 題
分量 (昨年比較) [減少	同程度	増加]
		難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]
<p>【概評】例年通り、すべての問題がマークシート形式であった。出題分野も近年とそれほど変わらない。長大な問題文が特徴と見られてきたが、ここ数年は姿を見せていない。解答に要する計算量は適切な工夫ができれば多くはなく、標準的な学習をきちんと積み重ねていけばまずまずの得点が望めるセットとなっているが、最後まで解ききるには高度な発想を要する大問が複数あった。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	小問集合 (対数関数・式と証明・ 微分法・積分法)	(1) 対数関数の最小値と対数の方程式の解について考える問題。主要部分は相加平均と相乗平均の大小関係の活用と2次方程式の解と係数の関係である。標準的な出題であり、完答をしておきたい。 (2) 定積分で与えられた関数について考える問題。この小問も標準的な出題であり、完答をしておきたい。	標準
II	数列・整数	2 個以上の連続する正の奇数の和で表される整数について考える問題。文字を用いて一般の場合を考えれば、整数を偶奇が一致する2つの2以上の整数の積で表すことができるかどうかポイントであることがわかる。個別の具体的な数値について検討する(1)の段階で容易でなく、多くの受験生が苦戦したと思われる。	難
III	図形と計量	三角比などを用いて与えられた三角形に関する様々な値を求め、最後に空間図形について考える問題。三角形に関する様々な値について考える(4)までは徐々に難易度は上がってゆくが、標準的な出題とみてよいだろう。最後の(5)の四面体の2辺がなす角を求める問題では、形を把握する段階で多くの受験生がつまづいたと思われる。	やや難

設問別講評			
IV	確率	サイコロを5個同時に投げるときに出る目についての確率の問題。標準的な内容が幅広く問われている。	標準
V	数列・整数	初項と漸化式で与えられた数列と1次不定方程式についての問題。1次不定方程式の係数が数列の項であることから(2)でそれとなく注目を促されている数列の項の関係式を活用できれば計算量はそれほどでもないが、気づけないでユークリッドの互除法を用いたりしようとすると計算が煩雑になる。	やや難

合格のための学習法

出題分析にも記したが、今年度は解ききるには高度な発想を要する大問が複数出題された。ただ、それらについても、標準的な学習を重ねていれば途中までは解答できる。分量については概評で「計算量も適切な工夫をすれば多くなく」と記したが少ないという訳でもない。これまでは計算量が多い出題であることも多く、そのような年は計算の巧拙が得点に大きく影響するものと思われる。普段の学習から効率のよい計算方法の習得を心がけてほしい。また、手法の選択も意識してほしい。たとえば図形的な考察を適切に行うことで途中の計算を簡略化できることは少なくない。しばらく姿をみせていないが、総合政策学部の数学入試問題の特徴の1つとして、問題文が長く題意を把握するのに時間を要する問題が出題されることが挙げられる。過去問の演習などを通じて、そのような問題にも慣れておくとよいだろう。